

## 抗 議

四月になると娘は小学五年生に進級し、FCスマイルズでのカテゴリーもU-10からU-12に上がった。それに合わせて私もU-12のアシスタントコーチになった。三月までU-12を指導していた山下チーフコーチは大阪に転勤となり、六年生のヒカルちゃんのお父さんである吉田コーチが急遽きゆうきよチーフコーチに就任した。

U-12のコーチは責任が重い。六年生は小学生年代の最後の年であり、今まで一生懸命やってきたサッカーの花を咲かせる一年にあたる。公式大会は五月に八人制の大会が始まり、秋には総決算の十一人制の大会が控えている。それらの大会は地区大会から県大会、そして関東大会までつながっている。舞台の幕は上がり、彼女たちのサッカーライフのひとつのピークがやってくるのだ。

指導者としては「ゴールデンエイジ」と呼ばれるこの年代の子どもたちに、きちんとサッカーの基本を教えなければならなかった。彼女たちがもしこの先もサッカーを

続けていくのならば今の時期に身につけておかなければならない技術がたくさんあった。

新チームになって最初の週末、スマイルズは隣町で行われるカップ戦に出場した。そこにはこれから地区大会で対戦することになるほとんどのチームが顔を揃えており、ゴールデンウィークから始まる八人制の大会の前哨戦ぜんしやうせんとなっていた。

「うーん……」

菜の花の咲くグラウンドの片隅に腰を下ろし、作戦ボードを手にした吉田コーチは悩んでいた。選手個々のポジション適性を見極め、スターティングメンバーを決めなければならなかった。今年のU-12チームは、六年生が十二人、五年生が五人いた。十七人のなかから八人を選ぶのはただでさえ困難なのに、吉田コーチも私と同じお父さんコーチだから気を遣うことも多い。

子どもたちのサッカーチームが抱える問題の多くは、選手が集まらないことではなく、指導者不足と審判の準備だった。どちらもいなければ試合や練習ができないのに、そのなり手がとても少なかった。引き受ければ一年間のほとんどの休日を奪われてしまい、しかもギリギリの運営資金でやっているため多くがボランティアだ。

大会一日目。吉田コーチは、すべての選手を様々なポジションで試し、可能性を探っていた。試合が終わると小さなノートに気になった点を書き込み、ときおり私に感想を求めてきた。一日目を一勝一敗一分けで終えたスマイルズは、二位パートのリーグ戦に進んだ。

それは大会二日目の第一試合が終わったときのことだった。

ベンチを引き上げる吉田コーチと私の背中に、突然、怒鳴り声が聞こえてきた。

「おい！ カナエ、帰るぞ！ 試合に出られないんじゃないぞ。こんなところにいたって意味がないぞ」

びっくりして振り返ると、六年生のカナエちゃんのお父さんが、一試合目をベンチで終えた娘の腕を引っ張っているところだった。一瞬なにが起きているのかわからず、私は口を開けたまま吉田コーチの顔を見つめた。吉田コーチも驚いた様子でふたりのやりとりを見つめている。

腕を引っ張られたカナエちゃんが、小さな声で「なんで？」とつぶやくのが聞こえた。お父さんは、そんな娘の態度が気に入らなかつたのか一段と力を込めて腕を引っ張り、怒鳴り声をあげた。

「レギュラーになれないんならサッカーやってる意味ねえんだよ！」

風が強く吹き、グラウンドの土を舞い上げた。私は金縛りにあつたようにその場から動くことができなかつた。

それは私が中学校三年のときだった。

サッカー部の部室の前には、まだ折り目が目立つぶかぶかのジャージを着た一年生が列を作っていた。「キャプテン翼」のアニメの影響で、入部を希望する一年生の列は、隣のテニス部の部室の向こうまで続いていた。

入部届を顧問の先生に渡すと、一年生はさっそく練習に参加した。まだスパイクも履いておらず、運動靴でボールを蹴る彼らのほとんどは初心者だったが、ひとりだけずっとサッカーをやってきたのがひとめでわかる一年生がいた。ボールコントロールが際立っており、細かいタッチのドリブルで、三年生の間をすり抜けて行く。先生もすぐにその一年生の実力に気づいたようで、まるで他には新入部員がないかのよう  
に、彼にだけアドバイスを送った。

私はその様子をゴールポストに寄りかかって見つめていた。三年生になってやっとレギュラーになれると思っていたのに、また一步遠のいた気がした。

誰にも声をかけずに部室へ戻ると、制服に着替え、かかとを潰したスニーカーを引きずるようにして校門を出た。

家に帰ると食卓には揚げたてのコロッケが並んでいた。大好きな献立だったけれど、あまり食べる気がしなかった。付け合わせのサラダを作るために野菜を切っていた母親の背中に、ずっと考えていたことを話した。

「オレ、部活やめるわ。やっぱさ、高校受験、大事じゃん」

「なに、急に言い出してるのよ。あんたは勉強が嫌いだし、サッカーが好きなんですよ」

「だってさ、一年生にうまいやつが入って来ちゃったんだよ。もうレギュラーにならないよ。それならサッカーやっている意味ないよ」

母親は包丁を動かす手をとめると、蛇口を捻り、手を洗った。冷蔵庫に吊るしてあるタオルで手を拭き私の前に立つ。見上げるようにして睨みつけてきた。

「あんたさ、レギュラーになれないからサッカーやめるって？ ふざけんじゃないよ。悔しいならその一年生の何倍も練習してうまくならないよ。お母さん、絶対許さないからね。もし部活やめるなら高校も行かせないよ。自分でやり出したことを途中で放り出すような子は高校行っちゃってやめるかもしれないからね」

「でも三年生でレギュラーになれないんじゃないよがねえじゃんかよ」

「バカじゃないの。レギュラーだけがサッカーなの？ えっ、サッカーってそういうものなの？ あんたがそうやってぐちゃぐちゃ言ってるあいだも、その一年生はきつ

と練習しているわよ」

私は結局、部活をやめなかった。最後の最後までレギュラーになれなかったけれど、サッカーを続けた。

声を荒らげたお父さんは、吉田コーチに不満をぶつけると娘を連れて帰ってしまった。カナエちゃんの泣き叫ぶ声がいつまでも耳に残った。

それでも試合は続き、二試合目を勝利したスマイルズは、勝てば二位パート優勝となる第三試合が始まった。吉田コーチは、ベンチから立ち上がり、大きな声を出して選手を鼓舞している。

試合は一对一の同点で、PK戦に突入した。

いったんベンチに引き上げてきた子どもたちが、「勝てばトロフィーあるんだよね？」と尋ねてくる。

「あるよ」

「チヨ―緊張！」

水筒の水を飲み、吉田コーチが読みあげるPKキッカーの順番を真剣な表情で聞いている。

「あー見てられない」

一人目の選手が難なくゴールネットを揺らし、相手選手の番になると、この日はまったく出番のなかった私の娘がベンチで手を組み、スマイルズの勝利を祈り始めた。しかし、その祈りは通じず、PK戦は敗北した。最後にゴールを外したナホちゃんはその場で泣き崩れると、チームメイトが一斉に駆け寄り、肩を抱いて励ましている。「いい経験ですね」

吉田コーチが、振り向いて笑顔を見せた。

河川敷の向こうを流れる川に夕日が反射し、キラキラと光っている。吉田コーチと私は目を細めながら閉会式を眺めていた。優勝チームにひととき大きなトロフィーが渡されると、わあっと歓声があがった。

「疲れましたね」

「いやあ、参りました。まさかあんな抗議をされるなんて思ってたから、なんかもう嫌になっちゃって。二試合目が始まるまで、もうコーチをやめようって考えていたんですよ」

確かに私があの状況に置かれたら、同じことを考えただろう。

「だって親が言うから試合に出すってなったら、それはもうサッカーじゃないでしょう？」

「レギュラーだけが、サッカーじゃないですよ」

あの日見た母親の顔を思い出しながら私は答えた。